

特集「意識」によせて

吉田 正俊

[北海道大学人間知・脳・AI研究教育センター (CHAIN)]

“意識”とは何であろうか？ この問いはかつて哲学の問題と捉えられていたが、神経科学における計測技術の革新などによって、ここ数十年で急速に科学的な解明が進んできた。動物を対象としたシステム神経生理学では、両眼視野闘争の研究などで知覚的な意識に関わる神経活動が報告されてきた。また、ヒトを対象とした脳機能イメージングでは、ポジトロン断層法 (PET) や機能的磁気共鳴画像 (fMRI) を用いて意識に関わる神経活動が計測されてきた。このような研究が明らかにしたのは、意識に関わっているのは、1つの神経細胞や脳部位ではなくて、ネットワークとしての脳だということだ。そこでやり取りされる情報に注目した“意識の理論”が提唱されるようになってきた。しかし意識とは、けっして知覚だけに関わるものではない。意識とは、身体を持つ自己によって経験されるものであり、内受容感覚に基づく情動、感情と深く関わるものだ。このような側面についての研究も進んでいる。このように私は意識の科学の現状を捉えている。

本特集ではこのような視点から、意識の科学に関連するトピックを扱っている研究者から寄稿していただいた原稿を、「Ⅰ. ヒトを対象とした実験的アプローチ」、「Ⅱ. 動物を対象とした実験的アプローチ」、「Ⅲ. 理論的アプローチ」の3つに分けて構成した。本特集が意識の科学における国内の重要な研究をすべてカバーしているとは言えないが、少なくとも意識研究という分野の幅広さを示すことはできたのではないだろうか。

日本国内での意識研究は、私吉田も関わってきた生理研研究会や CoRN 年会 (現 APCN 年会) などのイベントで研究グループの形が見えてきていたが、ここ最近では学術変革領域 B「クオリア構造」(代表 土谷尚嗣) や基盤研究 A「意識変容の現象学」(代表 田口茂) などの科研費でサポートされた研究グループが始動している。これらに参画している方からも寄稿いただいた (土谷, 大泉, 山田, 西尾, 鈴木啓介)。また、研究機関としても、私吉田が所属する北大 CHAIN では主要な研究テーマとして“意識”と“自己”を掲げている。所属する3名から寄稿いただいた [宮原, 鈴木啓介, 鈴木大地 (客員)]。また、理研 CBS からは、2021 年 7 月に新たに着任した2名 (Lau, 宮本) から寄稿いただいた。これはエポックメイキングな出来事だと思う。本特集によって、意識研究の盛り上がりを実感して、意識研究に加わる人が増えてくれたらいいと思う。(文中敬称略)